

追善と追孝

佐藤 健

もともと仏教と儒教はその思想を異にするものであり、反対の立場に立つものである。すなわち儒教は、仁義礼智信をとく五倫五常の人倫の道、いわゆる世間道をとくのに對して、仏教は、空、無常、無我をとき、世間一切の執著をはなれ、さとりを開くという出世間道をとくものである。

このように相い反する思想は、とうてい一致することのできないものと考えられ、ここに仏教が中国に受容される一つの大きなかべがあつたといえる。いわば中国仏教は儒教と仏教との衝突と妥協と調和の歴史であつたともいえる（かといつて道家思想あるいは道教などのかかわりがなかつたというのではない）。

仏教が中国に受容される過程において、いわゆる外来と土着、受容と展開という観点より追善と追孝という問題を取り上げてみることにする。『孝経』の紀孝章第十には、

孝子の親に事えるということは、居は敬を致し、養は樂を致し、病は憂を致し、喪は哀を致し、祭は嚴を致し。

とあり、この五つがそろつたならば、よく親に事えたといふことができるという。儒教を基盤とする孝社会において、まず「親に事える」ということが先決であり、その最後に、祭には尊敬をつくすという、いわゆる祖先のまつりが明確にうたわれ、これらが完成する

ことにより孝は全うされるとする。つまり孝は、単に生前だけでなく、死後の葬式、墓、三年の喪中、忌日の法会や、さらに祖先に對する祭りの作法までも含むものであつた。『孝経』の最後の喪親章には、ことこまかにその意義をのべている。つまり祖先崇拜は、孝の延長であり、孝道上なくてはならないものとされた。したがつて孝の倫理からすれば、祖先のまつりをしないものがあつたり、また祖先のまつりをするものがなくなるということは、そのまま大不孝を意味したのである。

中国の家族は家父長制度の典型であつて、祖先崇拜の觀念によつて強く規制された共同体であつた。祖先と子孫とは、いわば孝道によつてささえられた家族關係の延長としてつよく結ばれていた。したがつて祖先のまつりを担当する子孫のたえることが、もつとも不孝であると考えられたのは当然である。

祖先崇拜は、また家族内における權威關係の源泉でもあり、父子關係、夫婦の關係、婚姻をも嚴重に規制することとなつたのである。『礼記』の中庸篇にいうように、

死につかうるは生につかうるが如くせよ。これが孝の至りであるといつたり、また坊記篇に、

宗廟を修し、祀事を敬すは民に追孝を教ゆるなり。

というように、敬の至れるものとして孝を説くことは、孝を宗教的なものとし、これによつて親の權威を絶対化し、親を神聖化しようとする封建社会の要請と見ることができ、孝を宗教化しようとするものと解釈することもできるが、むしろそれは絶対的なものを相對化し、宗教的なものを倫理の次元に引きよせて理解しようとすることにあつたと見るべきで、ここにむしろ儒教の立場があるとすべき

である。祭りという宗教的礼をもつて、世俗的な孝の一部とし、あるいは孝の延長と解していることを知るのである。

道綽のあらわした『安樂集』は、中国に展開した浄土往生の信仰をすすめる書物であり、その題名が示すごとく、安樂浄土の要文集である。したがって当時の中国人の仏教受容の諸相（まさしく中国人が求めた救いの宗教としての仏教）を端的に示すものとして注目することが出来る。現世においてはたとえ救われなくとも、臨終を契機として死後安樂な浄土に必ず往生できるという浄土教典の説示は、たとえそれが未来往生であつても、苦悩な生活を余儀なくせられた一般民衆の大いなる救いとなつたことはたしかである。死後という未知の世界に対するおそれは、浄土欣求という熱烈なる信仰とはうらはらに、地獄に墮すこともありうるという不安をいつそうかきたてるものである。ことに孝倫理にささえられた彼等にとつて肉親とくに父母の死後の受生に必然的に関心がよせられたことは確かである。父母への追慕の念は追孝という祖先のまつりと複雑にからみあい死者への追善供養をかりたてたものであろう。

その証拠に道綽は『安樂集』において、『灌頂経』巻十一を引きつつ、

若し臨終および死して地獄に墮すものあらんに、家内の眷属、その亡者のために念仏および転誦、齋福すれば、亡者すなわち地獄を出でて浄土に往生す。（中略）現在の眷属、亡者のために追福すれば、遠人に餉するに定んで食を得るがごとし。

と、現在の眷属が追善することにより、地獄に墮している亡者を救出することができるという。こういった追善思想はなにも『灌頂経』に限るのではなく、『優婆塞戒经』（餓鬼中の父のために、子が追善

する）、『大乘本生心地観经』（地獄中の父母に追福することにより人天に往生する）、『梵網经』にもみられる。ことに『梵網经』は中陰中の亡者の追善を説くものとして有名である。

してみると、これら追善、追福を強調する一連の仏教経典は、まさに儒教が孝の完成として重視する祖先のまつり、追孝の教えと密接に関連しあい、仏教の祖先のまつり、追善供養として展開したことは疑いないといえる。現在生存中の者が死者のために行う追勝福、追善という光（功德）が死後の世界、亡者にまでおよぶという論理は、まさに孝が生存中にのみ有効であるだけでなく、その孝は死者にまでおよぶという追孝の論理と何ら矛盾するものではない。

仏教の追善の仏事、たとえば孟蘭盆会、申陰七七四十九日の忌のまつりは、まさに彼等にとつては、それがそのまま追孝として意義づけられたものであろう。つまり死者や父祖に対する孝のつづきであつたのである。

仏教の孝を説く經典は数多くある。たとえば『六方礼经』、安世高訳、『四十二章经』（迦葉摩騰、竺法蘭共訳）などで、その他にも多数ある。ことに『観無量寿经』は、「父母孝養」を往生の正因とする点において著名である。また、中国人自らによつて製作されたという『父母恩重经』、『孟蘭盆经』などは、広く民間に流布した孝經典の代表である。

現在、日本仏教をささえる、葬儀はもちろん中陰、年忌、盆会なども、形骸化された法事仏教と批判されながらも、実は祖先に対する、もつと身近には父母への追孝として、さらにそれは単に死者の対する追善におわることなく、自身の孝の完成という喜びとして意義づけられるのではなからうか。